
silence mirage ~ 天空の導き人 ~

る ~ し ~ 1 2 世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Silence
mirage
天空の導き人

【ZU-1】

N
8
7
6
0
X

【作者名】

るし12世

【あらすじ】

タイトル通り、silence mirageの続編です。

1（前書き）

前作品、silence
mirageを読んでからこちらの作品
を読んだ方がいいかも。

僕は今、電車で揺られながら流れていく緑の景色を眺めている。

今まで滅多に乗ることのなかった特急電車の、向かい合った4人座席。

その窓際に僕は座っている。隣には3人分の荷物。

僕の向かいには友人二人が座っているが、どちらも揃って眠りに
ついていた。

僕の真向かいに座っているのが入江 直之。いりえ なおゆき

クールな性格の口数の少ない少年で、彼とは中学の時から付き
合いだ。

ショートカットでさらさらした黒髪を持つ眼鏡少年で、今は黒の
ワイシャツに薄手のグレーのカーディガンを羽織り、下はジーパン
というラフな恰好をしている。

直之の隣にくろだ たけるいるのが黒田 武。

こちらは直之とは正反対で、誰にでも気さくに振る舞う活発な友
人だ。

セミロングの茶髪が印象的で、僕らの中では一番背が高く、17
5センチある。それでいて細身なため、当事者曰く、後ろから女性
に見間違えられることがよくあったらしい。

顔立ちもよく、俗に言うイケメンというやつだ。

こちらも中学時代からの友人であるが、彼と一週間以上付き合いが続いた女子は未だ見たことがない。

武は度が過ぎる程のゲーマーで、女子と一緒にいる時もついゲームの方に目がいつてしまったり、話題がゲームのことになったりして、愛想を尽かされるというのが毎度のパターンとなっているようだ。

黒のタンクトップにデニム地のハーフパンツという恰好で、この電車に乗るまでに、すれ違う女性の視線を何度か集めていた。

そして僕の名前は城崎^{しぎはづめ}春。

半袖の水色のＴシャツに灰色のカーゴパンツという出で立ちで、本日の小旅行に出向いている。

身長は３人の中では僕が一番低い。

直之と武はぐっすり眠っていて当分起きる気配はない。

みんなそれぞれ早朝に家を発ったからだ。

僕も眠気はあるけど、我慢できないというほどではない。

窓に薄らと反射した僕の顔は、無造作に伸ばした黒髪の下で瞼を重たそうに瞳が支えている、ちょっと間の抜けた顔になっていた。

季節は夏、８月の初旬で高校の夏休み真っ只中である。

と、今しがた電車はトンネルに入り、僕は慌てて視線を逸らした。

トンネルは短かったらしく、程なくして太陽光が車内に射した。

山岳の中を走っているの、窓は再び落葉樹の広がる森を映し出している。

電車に乗ってからかれこれ1時間が経過しようとしていた。

落葉樹が広げる緑を窓から暫く眺めていると、またトンネルに入った。

僕は決められたようにまた目を逸らす。

どうしてそんなことをするかって？ あるものが見えてしまうのだ。

・・・幽霊である。

きっかけは去年の冬。

僕はある少女に出会った。彼女がもうこの世の者でないということを知らずにだ。

彼女とはたった三日間しかいらなかった。

それ以降一度も会ってはいない。

いや、会うことはないだろうし、もう会ってはいけなのだろう。だから、今までに、もう一度会いたい、という気持ちを抱くこと

はなかった。

そしておそらく、彼女との出会いが、不可解な存在が見えるようになったきっかけなのだろう。

再びトンネルを抜けたのか、車内に射す太陽光の温度を感じたので、僕は外に目を向けた。

どうやら、ようやく山岳を抜けたのか、窓の外には清々しい青空と、空に浮かぶ太陽の光を受けて煌めく海が広がっていた。

海岸線は弓のように内側に湾曲していて、窓からは海沿いを右にカーブしながら伸びるレールが見えた。

そんな景色に見とれていたから僕は気を抜いていた。

「うげっ!？」

僕は瞬く間に顔をひきつらせた。

見えたのである。

海面に立つように浮いていた黒い人影を。

水場には多くの霊が集まるということをすっかり忘れていた僕は、これから行く場所が海水浴場だということを思い出し、溜息とともに肩を落としたのだった。

駅に着くと、改札を抜けて出口をくぐり、バスロータリーを抜けて徒歩5分程のところに、僕らが宿泊する旅館があった。

3階建てのその旅館は、海水浴場に背中を向けるようにして建っていた。

旅館の入り口は、古風な建物を思わせる重みのあるつくりで、いかにも値が張りそうな雰囲気には僕は少し後ずさりしそうになった。

この旅館は、実は直之の両親の友人が経営していて、直之の両親が話をつけてくれたお陰で、今回僕たちは特別に値引きという計らいをもらっている。

だから、本来ならこんな高そうな旅館には泊まることはない。

入り口の自動ドアをくぐり、フロントで鍵をもらうと、向かったのは最上階である3階の部屋。

扉を開けると、そこは畳10畳の広さのある和室だった。

ここでは二泊お世話になる予定だ。

数カ月後に待ち構えている進学に向けての受験勉強の息抜きにと計画された二泊三日の小旅行。

言い出したのは武だった。それを聞いた直之が動いてくれたので、この小旅行が実現した。

部屋に入るなり、皆一様に荷物を畳に下ろした。

部屋の真ん中には高級感のある漆塗りらしきテーブルがあり、その周りを座椅子が4つ囲んであった。そしてテーブルの上には茶櫃ちゃびつ

があり、そこに急須と茶筒、湯飲みが三つ置いてあった。

壁際には小さな液晶テレビ、その隣にある腰ほどの高さの小さな冷蔵庫の扉には『冷蔵庫の中にミネラルウォーターが冷えています。ご自由にどうぞ！』というシールが貼ってあった。

親切なホテルだこと。

部屋の奥には広縁ひろえんがあり、荷物を下ろして身軽となった僕たちは自然とそこに寄り集まっていた。

広縁にある窓からは、旅館裏側にある砂浜が見下ろせるのは当然のことながら、遠くの水平線を一望することもでき、沖の方を漂っているタンカー船らしき影まで見つけることができた。
まさに絶景である。

時刻は午前11時前。

砂浜は海水浴客でいっぱいだ。そのほとんどは家族連れやカップルと言っている。

砂浜にはカラフルなビーチパラソルがうちつけられ、色鮮やかなビーチシートで埋め尽くされていた。また、等間隔で監視台が設置されていて、監視員が目を光らせている。

旅館の近くにある海の家では、水着にエプロン姿の女性がウエイトレスをやっている、僕はつい見惚れそうになった。

もちろん、前述した通り、海で遊ぶ計画もしている。

しかし、僕はまた見てしまったのだ。

砂浜を滑るように不自然に移動する人影。

海面に立ち、動こうとしない人影。

そして一番はつとさせられたのが、旅館の袂からじつとこちらを

睨んでいる不気味な女性の影だ。

「ひっ!？」

面食らった僕は慌てて半回転して海から目を逸らすと、室内にはなにもいないことを確認してほっとため息をついた。

「海の家の子、むっちゃかわいくね？」

「そうだな」

と、武の問いかけに返答する直之の声が背後から聞こえてきた。しかし、一人だけ反対側を向いている僕に気づいたのか、

「大丈夫か？　なんか顔色悪いぞ？」

武が前に回り込んで僕の顔を覗き込んできた。

「ああ・うん。ちょっと体調おかしくなってきたから、今日はこゝで留守番してよ」

「ここまで来といてもつたいねえなー。まあ、明日もあるから今日一日で完治させなよ」

「あ・ああ」

そうして二人は早速海に出かけ、僕は一人ここに残ることになった。

静かになった室内で、鞆に入れていた、読み始めて間もない推理小説を手にとると、畳に寝ころんでしおりの挟んだページを開く。

そのページの一フレーズに目がとまり、ふと僕はその言葉を呟いた。

「汝、夜歩くなかれ・・・か」

>

正午過ぎに武から連絡があり、昼食を海の家でとろうと誘われたのだが、断りを入れ、僕はそのまま小説を読み続けた。

読むことに没頭し、気づけばいつの間にもやがて時刻は午後3時前。空腹を告げる腹の虫を静かにさせようと僕はホテルから出ることにした。

来る時に見つけていた、駅前ロータリー沿いにあるコンビニで、

弁当を買ってホテルに戻るといふ段取りで向かったのだが、そこで
気になることが二点あった。

一つは、コンビニへと向かう道中で聞こえた噂話だ。

三組のカップルの団体が僕の泊まっているホテルの方角へと向か
っていて、僕がすれ違った時にそれは聞こえてきた。

「ねえねえ？ 今日の夜さ？ 師走の旅館に行ってみない？」

「あ？ 確かこの近くにあるっていう有名なお化け屋敷のことか？」

僕はぞっとした。

幽霊が見えるという身ゆえ、そんな場所に近づきたくもなかった。

ただ、師走の旅館という名前だけは頭の隅に記憶しておいた。

もう一つはコンビニの中でだ。

店の中にいる時、ずっと視線を感じていた。というより凝視され
ていた。

相手は幽霊ではなく、人間だ。

しかも意外なことに僕と同年くらいの女の子。でも知らない子だった。

ウェーブのかかった茶髪セミロングの少女。

背は僕より低くて、透明感のある真白な肌に、同じく真っ白なワンプリースドレスを着ていた。

見ず知らずの子からなぜこうも凝視されるのかわからないが、こちらも女の子の方へ振り返ると彼女はわざとらしくぷいっとそっぽを向いた。

でも、気にせずに弁当を選んでいるとまた凝視される。

接触してくる気配はない。

恨みや憐れみをこめた視線というものではなく、ただ普通に見られているだけ。

気にせずにコンビニを出たが、彼女が追ってくる気配はなかったので、深く考えずにホテルまで帰ってきたわけである。

そしてコンビニ弁当を完食すると、食後の満足感から僕は眠気に襲われ、夕方戻ってきた直之と武に起こされるまで眠りについてしまったのだった。

夕方、友人二人が戻ってくると前述した通り熟睡していた僕は起こされた。といっても、部屋はオートロック式で鍵は僕が持っていたから携帯電話の着信音で目が覚めたのだが。

旅館内一階にあるレストランにて三人で夕食をとり、大浴場にて風呂を済ませて、三人一様に浴衣姿で宿泊部屋に戻ってきたのが夜8時半過ぎ。

部屋に上がると布団は既に敷かれていた。

布団の上でくつろいでいる僕と直之だったが、武はというと、自分のカバンを引き寄せて中をこそごそとあさっていた。やがて、

「じゃあ、これからお楽しみタイム！」

と、ハイテンションで両手で掲げたのは、ゲーム機だった。

早速室内にある液晶テレビにゲーム機をつなげ始める武に、僕はけじゃなく直之までもが呆れ顔だ。

武が持つてきていたのは、四人までプレイできる、相手を場外に吹っ飛ばして負かすことで有名な格闘ゲームだった。

「ただやるだけじゃつまんねえ。バツゲームアリだ。異論は許さん」

無論、僕も直之も異議を申し出たが断言通り却下された。

そして初戦で真っ先に敗北したのは僕。

「バツゲームの内容はこのアミダクジで決める」

そう言つて武は一枚の紙をテーブルに置いた。

どうやら彼の言うアミダクジのようだ。事前に作っていたらしい。何もかもが準備万端整つていて計画通りことが進んでいるようである。

「一から十の中で適当な数字を言ってくれ」

「ちょっとストップ」

と、横槍を入れたのは直之だ。

「その方法は武にとって有利だろ？」

言われてみればその通りだ。

このアミダクジをつくったのは武本人、数字の中に入ってるバツゲームを全て把握していると言っている。

それに数字の中に一番楽なバツゲームを入れていけば、もし武自身が負ければそれを選べばいいことになる。

「そうだな。なら俺が負けた時はこうしよう。二人が数字を言い合って、それを足した数字のバツを受ける。もちろん『0』もありだ。そうすれば俺は『1』のバツだって受けることになる。あとは足して二桁になったなら、十の位を省いて一桁目の数字のバツを受ける。これでどうだ？」

直之は無言のまま首肯した。

「さあ、仕切りなおした」

「じゃあ、二番」

僕が億劫そうに呟くと、武は二番の数字の割り当てられたアミダ

クジを辿っていく。

やがて彼は、にやつと不気味に微笑んだ。

「よし、じゃあ一発目のバツは、一階の売店で夜分の食糧を調達して来てもらおうか」

というわけで、二人から五百円ずつ託された僕はなくなく一人部屋を出たのである。

一階の売店に着くと、陳列棚から適当にスナック菓子とジュースのペットボトルを選び出してカゴに入れ、レジで支払いを済ませる。

ため息をつきながら売店を出た時、僕の視界にある人物の姿が映り込んだ。

コンビニで凝視してきた例の女の子だ。

彼女は数十メートル程離れた通路の突き当たりにいたので、僕がいることに気づいてないようだ。

奇遇にも泊まっていた旅館が同じだったようで、遠目で鮮明には見えないが、彼女もこの浴衣を着ていた。

やがて彼女は通路の角を曲がって見えなくなったので、僕は気にせずに部屋へと戻った。

そして、ジュースとお菓子をテーブルの上に広げながらの二回戦が開始された。

それから直之、武、直之、僕、とバツゲームが進行していく。

テーブルの上にぽつんと置かれた、なんのジュースを混ぜたのかもはや不明な、飲みかけの液体の入った湯のみに、ゲーム中ずっと正座させられて悶えている武、両の頬にシップ（なぜ持ってきてるのか？）を貼られた直之。

そして僕の頬には狐のようなヒゲの落書きが黒マツキーで入っている。ちよつ、まずいだろ、これは！

そして、6戦目に敗北を喫したのは直之だった。

「五番だ」

して、アミダクジの結果は、

「ナンパ・・・？」

アミダクジを見下ろしていた僕は、そこに書いてある通りのことを呟いた。

「ほづ」

と、反応の薄い直之はいつも通りの無機質な表情。

「なら、これには一つ条件をつけさせてもらう。今の時間は午後1時を少し回ったところ、ナンパしようにも人を見つuckerのは困難かもしれない」

「ああ、そういえばそだな」

「だからここから一階までを往復して人一人みつけれなかった場合はバツゲームはなしにしてもらおう」

「まあ、いいだろう」

直之の的確な物言いに言い包められたようで、武はあっさり納得した。

そして僕らは部屋を出た。

「よし、じゃあバツゲーム二回戦いつてみよう」

午後１時を過ぎているためか、通路の中は、先ほど売店に向かった時とは違い、薄いオレンジ色の補助灯と緑の非常灯だけで照らされていて不気味な薄暗さだった。

だから武の開始宣言も囁き声だ。

人気は全くない。

階段を下りて一階につくも、やはり誰もいなかった。

先程の売店は横網状のシャッターが閉まっていた。フロント、レストランにも同じくシャッターが閉まっていた。エントランスホールにも人気はない。

柱を背にしてある、アンティークを思わせる振り子時計は午後１時１５分を指していた。

「やれやれ、このバツゲームは無意味だったな」

武が悄然と肩を竦める。

しかし、とある通路の角を曲がろうとしたところで会話が聞こえてきたのである。

僕たちはなぜか反射的に慌てて引っ込んだ。
聞こえてきた声は二人分、どちらも女性の声だった。

「バツゲームスタートだ」

武はにかつと微笑むと、直之の耳元で囁いた。

「さ、行っ てきなよ」

「ああ」

一瞬の躊躇いもなく、直之は角を曲がっていく。
その後ろで、僕と武は壁に張り付くと耳をそばだてた。

そして直之の声が聞こえてきた。

「突然ですいませんが、よければ明日、僕と一緒に行動しませんか？」

その瞬間、女性の会話はピタッとやみ、辺りは静寂に包まれた。

数秒後、一人の女性の声が聞こえてきた。

「それはつまり、私たちをナンパしてるのかしら？」

「その通りです」

直之が即答すると、再び静寂が辺りを包み込む。

だが、やがて、

「・・・いいわ。こっちは三人、あなたたちも三人でちょうどいいもの」

一人がそう返答したが、僕の身体は突如硬直した。

隠れてるのに、どうしてこっちの人数を知られたのか？

僕ははっとして背後を見やった。

そこにあっただのは、外が闇夜のために鏡と化していた窓。

窓には直之の後ろ姿と女性二人の姿がくつきり映っているではないか。つまりそれは、向こうからもこちらが丸見えということだ。

「そういえばさっき『このバツゲームは無意味だったな』って聞かされたんだけど。これって、彼が今私らにやってるナンパがバツゲームだという認識でいいのかしら？」

もしかして、彼女さんたち、怒っていらっしゃる？

隣で武は苦笑いを浮かべていた。

「後ろの二人出てきなさい！」

怒声にもとれる声色だったので、僕はまた凍りついてしまう。

「仕方ない。行くぜ」

ぽんつと僕の肩を叩いた武は潔く角から出ていった。

なんでこんな目に・・・。

僕も落胆しながら、角から足を踏み出していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8760x/>

silence mirage ~ 天空の導き人 ~

2011年11月23日22時47分発行